

埋文化遺跡

No. 53

2005. 12. 22

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

今年度発掘調査の紹介

土居下遺跡 (胎内市塩津字土居下627-2ほか)

土居下遺跡は海岸砂丘後背の沖積地にある古墳時代前期の遺跡で、標高は約3.5mです。周辺には東側約1kmに古墳時代前期の円墳である城の山古墳があるほか、古墳時代前期から中期にかけての遺跡が多く分布しています。日本海東北自動車道の建設に伴い、4~11月にかけて10,330m²を発掘調査しました。

遺構は水田跡、堰、木道（橋）、溝、土坑などが、主に調査区の北端部で見つかりました。水田跡は畦畔の幅が約20~30cm、水田の一辺が約3~4mほどで、一枚の面積が約9~16m²の小区画水田です。内部には取水口（水口）や道（大畦畔）、島状の高まり（作業場か）も見つかりました。また、この水田の西側を画する溝との間には土手状の高まりが確認されました。堰は川をせきとめて水位を調節するもので、水田の南側を東から西に流れる川跡の下流側で見つかりました。流れに直交した横木の上に、先端部を尖らせた複数の丸材を斜めに打ち込んだ合掌型の構造と考えられ、これらの表面を覆う繊維の束も確認されました。

遺物は、壺、甕、高杯、器台、鉢などの土器や木製農具の広鋤、横鋤、大足（枠型田下駄）が出土しました。壺のひとつには、籠状の工具により「×」などの記号が口縁部に描かれていました（口縁部が逆位で出土しました）。広鋤は刃部が欠落していましたが、泥除けが装着できる形態と考えられます。大足は、縦80cm、幅60cmほどの枠組格子状のもので、足をのせる足板も一緒に出土しました。枠組の中央に足板を縄で固定し、枠の四隅に取り縄を結びつけ、これを腕で持ち上げて水田の上を歩行したと考えられます。田植え前の代掻きなどに使用された民俗例とよく似ています。また、現在調査中ですが、水田近くにあった浅い土坑状の遺構から、炭化した穀物（コメか）が見つかっています。

土居下遺跡は水田跡と堰、また木製農具が合わせてみつかったことで、県内、特に阿賀野川以北の古墳時代の農業形態を考える上で貴重な事例となりました。

（調査担当者：（株）吉田建設埋蔵文化財調査部 細井佳浩）



水田跡



堰



記号が描かれた壺



大足（田下駄）

道端遺跡 (岩船郡荒川町大字南新保字道端97ほか)

道端遺跡は越後平野北東部荒川左岸後背湿地の微高地に位置します。日本海東北自動車道の建設に伴い、12,400m²について今年4月から調査を開始し11月末に終了しました。見つかった遺構は、出土土器などから古墳時代中期後半～後期前半と弥生時代中期中頃～末の居住跡と思われます。

古墳時代の主な遺構としては、竪穴建物1軒、掘立柱建物1棟のほか、土坑などが検出されており、調査区を東西に横断する河川の東側では、北縁に6か所の土器集中か所が検出されました。同時代の遺物は、須恵器の杯身・蓋・甕・三方透かしの高杯・甕、土師器の杯・椀・甕・鉢・甑・低台の高杯、石製品では砥石・紡錘車などが出土しています。

弥生時代の遺構は54～56Q・R区に集中する周溝、炉、柱穴を伴う平面形が橢円形、隅丸方形の建物が9軒確認されています。これらの建物の施設は、確認し得る限りでは少なくとも二枚の包含層の直下から掘りこまれ、またそれぞれの面で複雑に切り合っています。また、この建物の集中する場所は、河川と一部V字形の断面を有する2本の溝によって囲まれています。

土器では北陸系の甕・壺、在地系の甕・壺・鉢、石製品では石鏸・大型石包丁・扁平片刃石斧・石包丁様石器・環石・管玉・管玉作りに使用された擦切り具が、木製品では建築部材などが出土しています。

古墳時代では、竪穴建物と掘立柱建物の調査は阿賀野川以北では極めて稀な事例で、まとまって出土した須恵器・土師器も注目されます。弥生時代中期では、北陸系の土器群と大型磨製石包丁などの石製農具を伴う集落跡が検出され、この地域に稻作農耕を定着させた人々の生活が明らかになることが期待されます。

(調査担当者：国際航業株式会社 前川雅夫)



古墳時代の竪穴建物(東から)



弥生時代の建物



弥生土器



大型磨製石包丁

道下遺跡 (胎内市古館字道下263ほか)

道下遺跡は海岸砂丘後背の低地の内陸側に広がる胎内川扇状地の扇端部付近に位置する縄文時代晚期前葉の遺跡です。日本海東北自動車道の建設事業に係り、本年6月から12月までの予定で発掘調査を行っています。調査面積は2,900m²です。遺跡は厚さ30~40cmの水田耕作土を含む現表土層の下で確認された、50m×30m程度の広さをもつ微高地部分に立地しています。標高は9m前後です。

発掘された遺構には、数軒の竪穴建物をはじめ、数多くの土坑・ピット・埋設土器・炭化物集中などがあり、集落跡であることがわかりました。また、集落跡がのる微高地の南東縁に沿って、北東から南西方向に溝状の流路跡が伸びています。竪穴建物は、直径4mから5mの円形や楕円形ないし隅丸方形状で、壁際に土留め材を埋め込んだ跡と考えられる溝（壁溝）がめぐっています。床面には炉や柱穴が見つかっているほか、作業用の台石が据えられている竪穴も見られます。遺構の中で最も多く検出された土坑は、地面に掘り込まれた直径1mから2mの円形ないし楕円形の穴です。いくつかの土坑からは大量の土器などが出土しました。埋設土器には、ほぼ完形の土器を一回り大きく掘った穴に埋め込んだものなどがあります。

出土した遺物には、縄文時代晚期前葉の土器（深鉢形・浅鉢形・壺形など）や石器（石鎌・石錐・石匙・磨製石斧・磨石類など）があり、遺構内からのものがほとんどです。このうち、煮炊きに使った深鉢形土器が大半を占めています。なお、石器は各器種ともさほど多くはありません。

今回の発掘調査では、小規模ながら縄文時代晚期前葉の竪穴建物を中心とした集落のほぼ全体が明らかになるなど、大きな成果が得られました。越後平野では縄文時代の竪穴建物の調査例はなく貴重な発見です。

今後、調査結果をもとに集落の姿や性格などを明らかにするとともに、胎内川扇状地上で近接するほぼ同時期の畠塚遺跡・野地遺跡との関連性、さらに山地や丘陵沿いに立地する規模の大きな遺跡との関係を明らかにすることも課題となります。

(調査担当者：(株)シン技術コンサル 折井 敦)



石囲炉をもつ竪穴建物



炉石を抜き取られた竪穴建物



土坑



横位の埋設土器

なかそね 中曾根遺跡 (岩船郡荒川町大字金屋字中曾根ほか)

中曾根遺跡は胎内川によって形成された扇状地の端部に位置しています。日本海東北自動車道建設に先立って、4月から10月まで、約8,900m²について調査を行いました。遺跡は現水田面のすぐ下に存在し、調査の結果、弥生時代中期末から後期初頭、奈良・平安時代の2時期の遺構・遺物が発見されました。

弥生時代では中央に炉を持つ住居や土坑が検出されました。また、土器のほか、木の伐採に用いた磨製石斧、狩に使う石鎌などが出土しました。奈良・平安時代では掘立柱建物・土坑・溝状遺構・自然流路などが検出され、土師器や須恵器、墨書き土器などが出土しました。

今回の調査で出土した弥生土器は東北地方の影響を受けたもので、中期の土器の特徴と後期の土器の特徴を併せ持っています。このことから本遺跡の土器は、下越地方沿岸の土器の変遷を解明するうえで重要な資料になるものと考えられます。

(調査担当者：加藤建設(株) 青木 学)



北区全景



弥生土器

かもふけこう 鴨深甲遺跡 (阿賀野市大字寺社字鴨深甲)

鴨深甲遺跡は阿賀野川右岸の自然堤防上に立地し、標高11.7mを測ります。国道49号安田バイパスの建設工事に係る面積5,000m²を、8~10月にかけて発掘調査しました。その結果、中世の集落を構成する遺構・遺物が見つかりました。

遺構は主に掘立柱建物13棟、井戸19基、水田と推定される凹地遺構約250基です。これらの遺構は、建物と井戸がセットとなり、3つに分かれて分布します。そして、それぞれの遺構群を取り囲むように水田と推定される凹地遺構が存在します。

遺物は中世陶磁器を主体とし、中でも井戸からは14世紀から15世紀前半にかけての珠洲焼がやや多く出土しています。このほか水溜めに使用された曲物、柄杓、箸などの木製品が出土しています。

このように14世紀から15世紀前半の家々が散らばって存在する集落の一部が明らかになりました。

(高橋保雄)



遺跡近景



井戸

報告書作成中の遺跡

のなかどてつき
野中土手付遺跡
(新発田市野中土手付)

野中土手付遺跡は新発田市（旧加治川村）に所在し、平成10年に日本海東北自動車道工事用道路建設に伴い3,020m²を発掘調査しました。調査の結果、遺跡は古墳時代前期初頭（3世紀中頃）と奈良・平安時代（8世紀後半から9世紀）の2時期の集落であることがわかりました。遺跡内を流れる自然流路からは古墳時代後期から奈良・平安時代に至る遺物が出土しています。

注目される遺構は平安時代の掘立柱建物8棟と井戸1基、多数の土坑、溝状遺構で、一部杭列で区画された建物区域がありました。遺物では須恵器、土師器のほか大量の木製品が出土し、封緘木簡の断簡（切断されて廃棄された木簡）を含む複数の木簡が確認されました。また、「王」や「凡」「方」「丈マ人万」「道嶋」と書かれた人名を含む墨書き土器も大量に出土しています。

近年、胎内市を中心とする旧紫雲寺潟周辺では、官衙関連遺跡が次々発見されています。本遺跡も平安時代には近隣の官衙関連遺跡と文書をやり取りするなど、密接な関係をもつ集落であった可能性があります。

(佐藤友子)



平安時代　掘立柱建物

すなやまなかみちした
砂山中道下遺跡
(新発田市湖南字砂山中道下)

砂山中道下遺跡は新発田市（旧加治川村）に所在し、平成10年に日本海東北自動車道工事用道路建設に伴い2,590m²を発掘調査しました。遺跡は旧紫雲寺潟の南端にあり、潟に流れ込む数本の自然流路が検出されています。調査の結果、遺跡の中心は室町時代（14世紀）の集落であることがわかりました。

室町時代の遺構は掘立柱建物8棟と井戸5基、土坑、溝状遺構等が検出されています。周囲を溝で囲まれた掘立柱建物も検出されています。注目される遺構は火葬跡と見られ、漆器皿1点と人骨片が出土しました。分析の結果、骨片は成人のものであることがわかりました。しかし、焼けて縮小変形があるため、性別などはわかりませんでした。中世において火葬されるのは、武士をはじめ上位階級の人々と考えられます。また、近接する自然流路の岸辺から、「南无大日如来」と書かれた卒塔婆や「急々如律令布」と書かれた呪符が複数出土しています。これら火葬跡と卒塔婆や呪符の出土から、中世の葬送儀礼の一端を解明できる可能性があります。



卒塔婆「南无大日如来」

(佐藤友子)

埋文インフォメーション



★展示室入り口の情報コーナーです。
ぜひご覧ください。



★下記のメニューをご覧になれます。

- What is 埋文事業団
- 発掘調査ガイド
- まいぶんちゃんの歴史教室
- 発見！にいがたのむかし
- 埋文事業団の刊行物
- 広報紙「埋文にいがた」
- おしゃせ
- リンク集

資料室の利用案内



県内外の埋蔵文化財に関する図書等を多数所蔵しています。
閲覧を希望される方は、資料室までお申し出ください。

開室時間：平日(月曜日～金曜日) 8:30～17:00
閉室日 土・日・祝日・年末年始(12/29～1/3)

●資料のコピー

実費負担にてコピーを受付けています。
コピーを希望される方は、職員までお申し出ください。

料金：白黒コピー………1枚 10円
カラーコピー………1枚 40円



学校との連携について



当事業団は、埋文センターでの学習に協力しています。
また、要請により職員を派遣する出前授業も行っています。
ご相談ください。

埋文にいがた 「定期送付について」

当事業団では、埋蔵文化財に対する理解を深めていただくために、最新の発掘調査情報や県内の史跡などを紹介した広報紙「埋文にいがた」を、年4回(6・9・12・3月)発行しています。

定期送付をご希望の方は、右記の要領でお申し込みください。

申し込み方法

- ①当館2階の資料室へご来室ください。
- ②下記の係までお電話ください。

☆受付時間：平日(月曜日～金曜日)8:30～17:00

※送料のみ、切手でいただきます(「埋文にいがた」は無料です)。

申し込み先

(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
「埋文にいがた定期送付受付」係
〒956-0845 新潟市金津93-1
TEL: 0250-25-3981 FAX: 0250-25-3986

☆「埋文にいがた」は、1階ロビーのテレビラックにあります。自由にご覧ください。
☆「埋文にいがた」は、ホームページからもダウンロードできます。

埋文コラム「発掘から見えてきた“道”」

発掘調査では遺物のほかに人々が居住した住居や柱穴、食べ物を保管した貯蔵穴などたくさんの構築物の跡が検出されます。今回は2本の溝が平行して検出される道路の変遷を紹介します。2本の溝は側溝と考えられ、私たちの住む町中の現在の道と同じです。

古代の道(奈良・平安時代:約800~1,300年前)

徵税や都で決定した法令を地方へ伝達するなどのために、国家によって道路が本格的に整備されました。古代の道には二つの特徴があります。一つは直線的につくられ、カーブという考えがないことです。曲がる時は、二本の直線（道）が交差するように屈曲します。もう一つの特徴は、全国的には同じ道幅で作られていることです。各地で検出される古代の道幅は6・9・12mのいずれかで、つくられた時期や重要度などにより差が生ずるようです。

越後と都を結ぶ北陸道は6mか9mということが発掘調査でわかつてきました（県内では未確認）。県内では和島村八幡林遺跡や胎内市西川内南遺跡などで古代の道が検出されています。写真1は山手から海岸方向へ向かう道で、古代の道の特徴を現わしています。



写真1 古代道路状遺構（西川内南遺跡）



写真2 中世道路状遺構（下割遺跡）



写真3 穴の連続する側溝（西川内南遺跡）

中世の道(鎌倉・室町時代:約400~800年前)

武士の時代に入ると、幕府は反乱などの危機に備え、鎌倉につながる街道などの整備を行ないます。一方で地域の有力者であった各領主や武士も道をつくり整備を図ります。その目的は支配地内から税などの物資を運搬したり、戦乱時の軍事的な急務に備えたりするためです。

地域ごとに独自に道路整備を行うので、古代のような全国的な統一性や規格性はありませんが、その地域の実情に合わせた改修が見られます。一例として、上越市下割遺跡などでは路盤改良の痕跡と思われる路面上の凹凸（波板状遺構）が検出されました（写真2）。また、西川内南遺跡などでは柱穴のような径30cm前後の穴が連続して側溝を構築する状況が検出されています（写真3）。

道は人馬が往来し物資を運搬するだけでなく、統治のための命令伝達にも使われ、中央やその地域独自の文化を伝え広める役割を果たしてきました。道は各時代において重要な役割を担い、今もその役割を果たし続けているのです。

(田中一穂)

〈参考文献〉

- 木 下 良 1996 『古代を考える 古代道路』吉川弘文館
- 藤原良章編 2004 『中世のみちを探る』高志書院
- 武部 健一 2003 『ものと人間の文化史116 道I・II』法政大学出版局

県内の遺跡

ざ おうごんげん
蔵王権現遺跡 (平成6年 国指定)
 遺跡所在地：胎内市蔵王

蔵王権現遺跡は奥山荘城館遺跡の1つとして、黒川城跡、臭水油坪とともに国の史跡に指定されました。奥山荘は旧中条町・旧黒川村・旧加治川村を中心とする広大な中世荘園で、「吾妻鏡」(1186年)に「殿下御領奥山荘」とあるのが初見です。

奥山荘北部（旧黒川村）の蔵王山中に位置する本遺跡は、蔵王権現本堂をはじめとする修験道（日本古来の山岳信仰に仏教や道教などが加わってできた宗教の一派）関連遺跡で、役行者（修験道始祖）が大和国吉野の金峰山の蔵王権現を勧請し、創建したと伝えられています。以来、蔵王山は修験者の修行場として、さらに人々の信仰の靈地として盛んに登拝されました。

中世に入りこの地を支配した黒川氏は、代々蔵王権現を守り神として崇拝し、宝物を寄進するなどして保護しました。そのうちの1つである「柴燈鉢」（鉄製の護摩鉢）と「鰐口」（社寺の拝殿の正面に吊り下げた法具）は県有形文化財に指定されています。

その後、明治2年の神仏分離令（1869年）で蔵王権現は金峰神社に改称され、大正12年（1923年）に現在地（蔵王集落内）に遷されました。

本遺跡は虚空岳頂上部にある蔵王権現本堂跡（標高476m）と途中の参道にある今藏王堂跡、前立堂跡、役行者堂跡、箸心神堂跡などの諸堂、及び別当寺である金光山高全寺跡などから成ります。平成16年に当時の黒川村教育委員会が前立堂跡の確認調査を行い、建物礎石及び石組列を確認しました。

（写真・資料提供 胎内市教育委員会）



遺跡近景



前立堂跡礎石列



柴燈鉢

埋文にいがたNo.53

発行 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
 〒956-0845 新潟市金津93番地1
 TEL (0250) 25-3981
 FAX (0250) 25-3986
 e-mail : niigata@maibun.net
 U R L : <http://www.maibun.net>
 印刷 阿部印刷株式会社